

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第13話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチエリールタ：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノ皇女

シャーニューニダ：ムジート族

ニユンリン：混血魔族

嵐宮芽里：夕杜王女

浮世心愛：雷龍

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

ワウー：犬

フィル：アルデスナ王子

ユイシャ（20）：ラフドナ騎士

リチャクラオン：アルデスナ国王

ゲドーナ：ゲドン族首領

マウ：ゼットシグマ教祖

エリシア・ローズ：？

ヴァラン：ムジート族

福田黄瀬（12）：剣士

邪神の獣…？

巨人…？

エンリコ…カルナコマリ王子

シローリ（25）…踊り子

カズミ（27）…アイドル

ガセルヴル・ローゾヴァ…炎龍

構成員 A

○ホテル・個室

現実。

一行のチビイとワウー以外、寝ながら
苦悶の表情を浮かべている。

○（夢）シャーニューニダ宅・居間（夜）

ヴァラン、シャーニューニダに真顔を
向ける。

ヴァラン「お前は無能だ」

シャーニューニダ「え？」

ヴァラン「お前を生んだ両親が気の毒でなら
ない」

シャーニューニダ「嘘だ、兄さんはそんなこ
と说不ない」

シャーニューニダ、悲壮な表情で体を
震わせる。

ヴァラン「お前は魔族にしては優しすぎた」
シャーニューニダ「家族を大事に思ってなに
が悪いんだよ、兄さん」

ヴァラン「お前、悪事に手を染めろって言われたらそれをできるか？」

シャーニューニダ「家族のためなら……って、さつきからなんの話してるんだよ」

○（夢）遺跡地下・通路

ニュンリン、怒り顔のライネとゾールに詰め寄られる。

ニュンリン「やだ……もうやめて！」

ニュンリン、2人を振り払う。

○（夢）遺跡地下・最奥

シャーザベスラ、嵐宮芽里、アルノ・ヨナ、フィル、エンリコが、30メートルある巨人と対峙している。

芽里「逃げましょう！ もう持ちません！」
シャーザベスラ「でもどうすんだ！ このままじゃ僕たちは……」

フィル「仕方ない！ こうなってはどうにもできない！」

ヨナ「ゼラムがついに、成し遂げてしまった
のヨナ……これも、世界崩壊の序章に過ぎ
ないのヨナ」

○（夢）邪神の獣の城・頂上

チビィ、ぷるぷると震える。

チビィ「な、なんだここに？」

巨大な邪神の獣が、ルチェリールタ、
シャーニューニダ、ニュンリン、福田

黄瀬（12）と向かい合っている。

黄瀬、うずくまって倒れている。

ルチェリールタ「黄瀬さん！ 黄瀬さん！

しっかりして！」

ルチェリールタ、大声で黄瀬に呼びか
ける。

エリシア・ローズ「気づいた？ ここは夢の
世界。 あなたたちは今、教団ゼットシグ
マの計画によって悪夢を見させられている
の」

エリシア、チビィの横に立つ。

エリシア「私はエリシア・ローズ。時空の狭間である夢の世界に住んでいる、眠り姫よ」

チビィ「はあ？」

エリシア「これは、聖地メカルドの夢でありきみの記憶。君はちよつと特殊で……やつらの計画では、普通は捏造された会話を夢の人物とさせてトラウマをつくんだけど、君は俯瞰的にここを見ることができるの」

チビィ「ゼットシグマってのは仲間から聞いたけど、なにいつてるかわかんないぞ、わかりやすく頼むぜ」

エリシア「普通は夢の世界のその場所にいるんだけど、君みは夢の世界を映像作品のように見ているの」

チビィ「で、誰だこいつ。っていうかこんな記憶にないぜ」

エリシア「福田黄瀬……まだ大人になっていない凄腕剣士よ。君がこれの記憶がないのは、ここが時空の狭間だから」

チビィ「つまり未来のできごとみたいな感じ

か？」

エリシア「ええ」

チビイM「あれ、ボクがいないような……あ、ボクはボクだから2人いるわけないか」

エリシア、指パッチンをする。

○（夢）黒い空間

チビイ「な、なんだ？」

エリシア「私は、夢をある程度操ることができる」

エリシア、チビイを抱きかかえる。

チビイ「わっ。それはいいけどよ、いいかげん何が起こってるのか説明してくれよ。まだここが夢ってことしかわかってないぜ」

エリシア「うん。ゼットシグマは、王都に訪れた者に悪夢を見せる。特別な力を持つ私を利用してね。そして、あわよくば夢を見る者を廃人にして、邪魔者を消している」

チビイ「ひえっ」

チビイ、ぷるっと震える。

エリシア「ホテルとか至るところにそういう仕掛けが施されているの。そして、悪夢がもたらす恐怖を取り出して邪悪なエネルギーに変えている」

エリシア、チビイをなでなでする。

チビイ「なんで」

エリシア「かつて教祖だった男、ゼラムが作り出したローレ・レドニクスの完全復活のため。そして、邪神ブッダス・キセとレドニクスを世に放ち、世界を破壊するため。王の子供たちと旅をしてるってことは、そのことを聞かされてるんじゃない？」

チビイ「ああ、だいたい聞かされてるぜ」

エリシア「で、君にしてみらいたいことがあるの」

エリシア、チビイを離す。

チビイ、エリシアのほうを向く。

エリシア「それは、マルキュ神殿にとらわれている私の体を救い出してほしいってこと」
チビイ「なんでボクが。なんか特別って言う」

てたからそれか？」

エリシア「長いこと私はとらわれの身だったから、特別な力を持つ君が来てくれて助かった。まず、マルキュ神殿にある私に君を憑依させる。そして、ゼットシグマ構成員を殲滅する」

チビイ「でもボク闘えないぞ。自分で自分に憑依すればいいじゃないか」

エリシア「それはできないの。現役を退いてベラニン・セーニナに後を託した私には。

どうか、みんなを助けて」

チビイ「え？」

少しの間。

エリシア「きみに私の経験を渡す。せいぜいこれくらいしかできないし完璧とはいかないけど、それでなんとかなるはずよ」

エリシア、チビイに両手で優しく触れる。

（夢終わり）

○マルキュ神殿・最奥（夜）

エリシア、ぱっと目を開ける。

チビィM「え、本当にエリシアの体に入ってるぞ……」

エリシア、体を起こしベッドから降りてまじまじと自分の体を見つめる。

マウ「何に エリシアが起きただと」

ゼットシグマ構成員たち、ざわざわする。

エリシア「このへんな装置全部ぶっこわせばいいのか？」

エリシア、周囲にある機械装置を見つめる。

マウ「だが、エリシアが起きることは想定内。

問題は、どう動かれるかだ」

構成員A「どうすれば」

チビィM「エリシアの経験が体に流れ込んでくるぜ……」

エリシア「お前たちが、悪の計画ってのをやってるんだな？」

マウ「なんだこいつ、何を今更。それに、喋り方もちよっと変だ」

エリシア「くらえ！」

エリシア、構成員たちに向かって超巨大な氷魔法を繰り出す。

構成員たち、氷漬けにされる。

マウ、氷を回避して飛び上がる。

マウ「くそ！ 細心の注意を払っていたというのに！ どうしてこうなった！」

エリシア「遅いぜ！」

宙に浮いているマウに氷魔法が向かう。

マウ、氷漬けにされる。

エリシア、機械を氷漬けにする。

エリシア「ぶっ壊れろ！」

エリシア、腕を交差させる。

氷が割れ、機械と構成員たちが氷ごと碎け散る。

エリシア、倒れる。

すぐに起き上がる。

エリシア「ふう。やっと解放された……にし

でも、あそこにみんながいなかった……き
つと、名誉ある騎士は英雄になれたのね……
……ありがとう、ガウダマ・クラゲール……」

○ホテル・個室（夜）

チビィ以外の顔から、苦しみが消える。

○同（朝）

チビィ「おい、みんな起きろ！」

ワウー「わんわん！」

チビィ、呼びかける。ワウー、吠える。

一行、全員起きる。

芽里「ひどい悪夢を見ました……これは

ゼットシグマの陰謀……」

浮世心愛「わらわもじゃ……」

ルチェリールタ「うーん……」

チビィ「安心しろ！　ボクが解決してやった

ぜ！」

芽里「え？」

○ホテル・レストラン（朝）

人間や魔族が席に座って食事をして
いる。

チビィ、一行に夢のできごとを説明。

芽里「そうですか、エリシアに会ったのです
ね」

チビィ「あいつの話しによれば、もう大丈夫
なはずだぜ。ちよっとなににいつてんのかよ
くわかんなかったけどな」

チビィ、ルチェリールタの肩に乗る。

ルチェリールタ「私も、悪夢を見てた……昔、
自分のミスで殺しちゃった部下が、わたし
のせいだって」

チビィ「悪夢だから本当にあったことじゃな
いんじゃないか？」

ルチェリールタ「うん、そうだよ……」

ルチェリールタ、俯く。

○（回想）森、魔族の住処

逃げる魔族。

ユイシャ、血を嘔き出して倒れる。

ルチェリールタ「ユイシャ！」

ラフドナ騎士たち、ユイシャに駆け寄る。

ユイシャ「ルチェリールタさん……あなたみたいになりたかった……ごほっ」

ユイシャの口から血が嘔き出す。

ユイシャ、事切れる。

ルチェリールタ「ユイシャ……ユイシャああああっ！」

ルチェリールタ、ユイシャを抱きしめ、大声をあげて泣く。

（回想終わり）

○ホテル・レストラン（朝）

ニユンリン「泣かないで」

隣のニユンリン、ルチェリールタを抱きしめる。

ルチェリールタ「うっ、ひつく、ふええええ……」

ルチェリールタ、涙を流す。

○ゼラン王都・祭典会場（朝）

飾り付けがされて彩られている祭典会場。

人間や魔族たちが、楽しそうに騒いでいる。

一行、会場を見て回っている。

ニユンリン「ね、ルチェリールタ。楽しそうだね！」

ルチェリールタ「うん」

チビィ「でも、王様の護衛に行かなきゃいけないもんな。あんまり見てる時間ないぜ」

ニユンリン「そういえば王様は闘えないの？」

なんか毎回そうなのがする。その割に子

供は闘えてるくない？」

ヨナ「多分たまたまなのヨナ」

シャーザベスラ「ああ。僕の兄弟のカインも闘えないから王の子が闘えるってわけではないだろう」

ファイル「そうだろうな」

しばらく歩き、ステージにつく。

たくさんの民衆がステージを見ている。

一行、ステージに上がる。

リチャクラオン「ファイル。それにみなも。来てくれて感謝する」

ルチェリールタ「開催できたんですね」

リチャクラオン「ああ。さあ、そろそろ始まるぞ」

エリシア「助けくれてありがとね！　かわいー！」

エリシア、チビイをなでなでする。

シローリ（25）とカズミ（27）、

裏からステージに出てくる。

大きな歓声が起こる。

ルチェリールタ「か、カズミさん、どうしてここに……」

ルチェリールタ、驚きの表情を見せる。

カズミ「あ、ファンの人！」

カズミ、ルチェリールタを見る。

カズミ「私は、いろんなところで活動してるから！」

カズミ、ルチェリールタにファンサする。

ルチェリールタM「に、認知されてた！」

ルチェリールタ、頬に手を当ててにこにこする。

ニユンリン、カズミを見てむっとする。

シローリ「助けてくれてありがとうございませす！」

ルチェリールタ「お怪我などがなくて良かったです」

シローリ、カズミ「みんなー！　いっくよー！」

シローリとカズミ、踊り始める。

民衆の歓声が大きくなる。

空から、ガセルヴル・ローゾヴァが飛んでくる。

民衆A「来た、来たぞ！」

民衆、ざわざわし始める。

ルチェリールタ「ゴゴニペ、ガセルヴル・

ローゾヴァ……」

ガセルヴル・ローゾヴァ「ほう、俺を知っているとは、さすがラフドナ騎士団長だ。それと……久しいかな、コリウス・ヴァリス」

ガセルヴル・ローゾヴァ、心愛を見る。

心愛「そうじゃのう」

心愛、返事をする。

ガセルヴル・ローゾヴァ、空を舞う。

民衆から歓声があがる。

ルチェリールタN「それから、ガセルヴル・

ローゾヴァは民の質問に答えていった。占いの能力のもとだと本で読んだことがある」

ガセルヴル・ローゾヴァ、一行の方を

向く。

ガセルヴル・ローゾヴァ「さて、お前たちの

聞きたいことはなんだ」

ルチェリールタ「わたしは、妹のクレーディ

ーを探しています」

ガセルヴル・ローゾヴァ「ふむ……どうやら

カルナコマリにいるようだ」

芽里「よかったですね、ちょうどまだ行っていない最後の1つの国でしたし」

※ ※ ※

（フラッシュ）

チビィを狙って魔法を発動するクレー

デー。

※ ※ ※

ルチェリールタ「あ。あと、魔法の力がないのに急に魔法の力を手に入れてたんですけど」

ガセルヴル・ローゾヴァ「それは過去の人物がなんらかの目的で受肉したからっではないか？ 詳しい説明は省くが、受肉を行うとそのようなことが起こる」

ルチェリールタ「確かにそれだと辻褄が合いますね」

ガセルヴル・ローゾヴァ「それと、青いマナライトを5つ集めし時、この世界の真実の一端が見えるだろう」

チビィ「お、なんかすごそうだぜ！」

ルチェリールタ「なんかサービスされた」

ガセルヴル・ローゾヴァ「世界を救うのだから、ならばこのくらい協力しようではないか」

民衆「え、世界を救うってあのゲドン族からか？」

民衆、言葉を聞きざわわする。

シャーニューニダ「次は、我の兄ヴァランについてお聞きしたい」

ガセルヴル・ローゾヴァ「ほう……」

ガセルヴル・ローゾヴァ、しばらく沈黙。

シャーニューニダ、ガセルヴル・ローゾヴァをじっと見つめる。

ガセルヴル・ローゾヴァ「ゼラン遺跡……いや、違う。魔界か？　これは……邪悪な、な、な、なんだこれは……邪悪すぎて、魔界になにかどす黒い……」

ガセルヴル・ローゾヴァの顔がこわば

る。

○ 船・個室（夜）

チビィー

チビィ「結局、あいつが言ってたゼラン遺跡
ってなんだったんだ？　ゼラン遺跡ってゼ
ランって言ってるから、ここゼラン王都の
近くにあんのか？」

チビィ、ふよふよ宙を舞う。

芽里「それをいうなら、ポストゼランガロニ
ア法国にだってその名がついていますよ。
それと、その遺跡の場所はどちらでもあり
ません。それは……夕杜王国にあります」
ルチェリールタ「え？」

芽里「そもそも、ゼランという名はとある人
物からとられたもの。なんで複数の国にそ
の名があるかと言うと、その人物が多大な
影響力を持っていたからに他なりません。
正確にはゼラムという名で私たちは知って
いるのですが。そいつが、レドニクスと邪

神を生み出した人物です」

チビィ「そういえばエリシアが、ゼラムって
言ってた気がするぜ」

ニウンリン「え待って、遺跡ってまさか。あ、
ああああ」

ニウンリン、顔がこわばる。口を両手
でふさぐ。

芽里「そういうことです、ニウンリン。あな
たの両親とイエヌダスラを殺した巨人……
邪神ブツダス・キセがいるあの遺跡です。
遺跡から魔界に行くと、おそらく最深部に
ローレ・レドニクスがいます。まあ、これ
に関しては見て集めた情報ではないので正
確かは保証できません」

ルチェリールタ「夕杜に遺跡があったから、
レドニクスから生まれたソガメーナたちが
襲って来たんだ……いや待って、キセって
最高神の名前じゃ？」

芽里「はい、その通り。最高神キセは……レ
ドニクスとの戦で傷ついて闇に染まってし

まったのです」

シャーニューニダ「じゃあ何か？　まさか：
：そのゼラムとやらが我の兄だとい
うのか？」

芽里「その可能性があります。そして、情報屋とゼラムが接触していた。同じムジート族のゼラムの情報が伝えられたため、シャーニューニダはあの時投獄された……と推測できます」

ニュンリン「じゃあ、あの時」

○（回想）夕杜王国・街道

ニュンリン「みんな死んで。ルチェリール
意外いらな……特にそっちの魔族。なん
かトラウマ思い出して嫌な感じがするんだ
よね」

と、シャーニューニダを見る。

（回想終わり）

○船・個室（夜）

ニユンリン「あーしがみんなと敵対してた時にシャーニューニダに感じたやな感じは、あの魔族集会にいたゼラムってやつがシャーニューニダの血縁だったから」

芽里「いえ、そう断定するには早いです、ですがお二人は、旅を続ける以上覚悟の準備をしていた方がいいでしょう」

芽里、真剣な表情。

ルチェリールタ「ニユンリン……」

ルチェリールタ、ニユンリンを心配そうな表情で見つめる。